
盲目の少年と魔女

幻夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

盲目の少年と魔女

【Nコード】

N9265V

【作者名】

幻 夢

【あらすじ】

魔女ゆえに、人間に迫害されてきた人間嫌いの魔女。盲目ゆえに、親に必要とされなかつた少年。ある日少年が精霊の森で魔女に助けられてから始まった物語。不定期更新です。

1 出会い

朝になりベットから出て、この家にたった一つだけある手鏡を見ながら彼女は銀の髪を梳かした。

それから黒い膝まであるワンピースを着て、朝食をとってから外に出た。

水の魔法で作物を育てている畑に、水をあつという間にやり魚を釣りに川へ向かう。

この精霊の森は魔物がたくさん住み着いていて、ここに人間が入って出たものはいない。

人々は精霊の森と言ってこの森に近づく人間はもういない。

そんな森は魔女にとって、とても居心地のいいものだった。

魔女とは人よりも何十倍も生き、魔法に優れている種族だ。

人々は自分たちよりも力があることを恐れ、魔女たちを迫害した。

魔女は次々に殺され、今では生き残りはほんのわずかしきいず、みな隠れて暮らしている。

川に向かう途中にもし人間にあった場合困るので、見えないよう

に術をかけておく。

たまに面白半分で人間が来るからだ。

川で魚を釣った帰り道に、人間の気配を感じて足を止める。

少しずつ近づいていくと、10歳くらいの少年が立っているのがわかった。

少年は金髪にエメラルドグリーンの瞳をしていた。

少年を魔物が困っているのがわかる、ほっとけば少年は死ぬだろうと思った。

目の前で死なれるのは後味が悪かったので、遠くから魔法で倒してさっさと家に帰ろうとした。

だが突然目の前で少年が倒れてしまい、ほっとくことが出来ずに立ち去らずに家に運んでしまった。

なぜこんなことしたのか分からずに魔女は後悔していた。

もし少年の目が覚めて外に魔女の存在が知れてしまったら、ここにはもう居られないだろう。

魔女は銀の髪に紫の瞳をしているのが特徴なのだが、なぜか魔女は魔法で髪と目の色を変えられない。

「なんでひろってきたんだろ……」

「うつっ……」

目の前の少年がゆつりと目を開ける。

「ここは……あなたは誰ですか？」

魔女は今姿を隠す魔法もしていなければ、フードや仮面もしていなかったで、姿を見られてしまったのだが、少年の様子は変わらなかった。

こつちを向いた少年は、魔女がどう言うものか知らないのだと魔女は思った。

「……」

少年はこつちを見ているが、目がまったく合わないのでまさかと思ひ、魔女はほっとした。

「あなた目が見えないのね……あと、先に名前を聞かせてもらってもいいかしら？」

少年は目が見えないのだ、魔女の姿など分かるはずもない。

「すみません、僕はルアン・ディーンです」

「わたしはディアナよ」

相手が姓を名乗って、こちらが答えないのは失礼かもしれないが、ディアナには姓は無いので、名乗る必要が無かった。

「何でこの森に入ったの？」

「僕は、この森にもしかしたら魔女が居るかもしれないと思ってきたんです。助けてくれてありがとうございます」

目の前に魔女が居ると知らずに話す少年に、ディアナは話しかける。

「魔女のことどう思ってるの？嫌い、怖い？」

ディアナは、苛立つ気持ちが抑えられなかった。

「僕は…嫌いでも怖いとも思いません。もしそうだったら、こっやって来たりしません」

そういつて微笑んで話を続ける少年を、信じられない気持ちでディアナは見ていた。

「でも、魔女のほうはどうなんでしょうね…僕は魔女は悪いものだと教えられましたが、魔女にとっても人間は悪いものなのかもしれない」

人間のほうで、どう言う扱いを魔女がされているのか予想がつく。

きっと少年は本心を話しているのだろう。人間は嫌いだが、この少年は嫌いじゃないとディアナは思った。

いつの間にか不思議と苛立ちは収まってきた。

「そうね……」

目の前の少年は目を見開いた、まるでとても驚いたとでも言うように。

「僕のいったこと、怒らないんですか？」

ディアナは怒る必要がどこにあるのかと思った。

「なんで怒る必要があるのか分からないわ？」

ディアナの言葉に少年はきょとんとして笑い出した。

「あなたのような人に、初めて会いましたよ僕。あ、そういえば」の森に何であなたは独りで居るんですか？」

ディアナは自分のことを言う決心をした。

少年とは会って間もないのに、なんだかとても暖かい気持ちになるから不思議だ。

ディアナはいたずらっ子のような顔をして、少年の額に手を当てる。

「わっ」

「目を閉じて、合図したら目を開けて」

少年が目を閉じて、ディアナが額から手を離すと声をかけた。

「いいわよ」

目を開けた少年が驚きで固まる。

「さっきの答えは……私が魔女だからよ」

そういつてディアナは少年に微笑んで見せた。

2 精霊の森の魔女

目の前で驚いているルアンを見ながらディアナは思った。

自分の姿を見て、ルアンはどう思ったのだろうと。

「魔女だったんですか！？あ、えと……ありがとうございます」

ルアンは突然のことに驚きながら礼を言った。

ディアナは慌てふためくルアンを見て、思わず吹いてしまった。

アハハと笑っているディアナを見て、ルアンは顔を赤くして反抗する。

「何で笑うんですかっ」

ルアンはディアナが魔女だと分かってても、驚いてはいるけど嫌悪するような目をしなかった事が、ディアナにとってはとても嬉しかった。

「なんかあなたを見ていたら、自分の思っていたことがばかばかし

くて……」

だから自分がこんなことを思ったことが変に思えてきたのだ。

「ディアナさんは……人間が嫌いですか」

ルアンが突然小さな声でたずねてきた。

その言葉にディアナが笑うのをやめ表情を消した。

「嫌いよ」

はっきりとディアナは人間が嫌いだと言った。

ただ人間よりも長く生き魔力を多く持っているだけなのに、人間は魔女を恐れて罪も無い魔女をたくさん殺した。

ディアナの家族も人間に殺されたのだ。

ディアナの答えにルアンは悲しげな顔をする。

「でも変ね、あなたのことは嫌いじゃないみたい」

「あなたは？」

そついつて微笑むディアナをルアンは驚いた顔で見っていた。

「嫌われていなくて良かったです。僕も嫌いじゃないです」

ルアンも微笑む。

「それに見ず知らずの僕を助けてくれるような優しい人を、嫌いになれるわけないじゃないですか」

そして二人して顔を見合わせて笑った。

3 やつと見つけた光（ルアン）

生まれたときから目が見え無い僕は、思えば家族にとっていらない存在だったのかもしれない。

目が見えない代わりに、気配やその場の空気を読むことが得意になった。

ある日僕が廊下を歩いている時、両親の話し声が聞こえた。

「何であんなできそこないが生まれてきたんだ！！」

この時はつきりと、僕が要らない存在だと僕は分かった。

本当はもつと前に気づいていたのかもしれない。

気づかないふりをしていただけだ。

もしもこの目が見えたら、僕はいらぬ存在じゃなくなるだろうか？

そんな時だ、魔女を知ったのは。

その日授業で先生が言っていた魔女の話。

希望が見えた気がした、魔女ならこの目をなおせるんじゃないか

と。

精霊の森にもしかしたら魔女がいるかもしれない。

そう思った僕はその日の内に屋敷を出た。

無事にたどり着くことは、目が見えない僕にとってないに等しい。

ついた所で獣に食われるだろう。

それでも、やっと見つけた光をあきらめたくは無かった。

少し歩くと段々草のおいが強くなった、森についたのだろうか。

無数の獣の気配を感じ歩くのを僕はやめる。

僕は食われて死ぬのだろうか。

そうして僕の意識は途切れた。

目が覚めるとベットの上にいた。

そして一人僕以外の気配を横に感じた。

きつと僕を助けてくれた人だろう。

「ここは……あなたは誰ですか？」

そういつて僕は尋ねる。

しかし相手は何か考えているようで答えない。

「あなた目が見えないのね……あと、先に名前を聞かせてもらってもいいかしら？」

声で女性だと言う事が分かった。

少しとげのある口調で彼女が話し、先に名乗らせようとしたのは失礼だったと思った。

僕が目が見えない事にも気づいたようだ。

「すみません、僕はルアン・ディーンです」

「わたしはディアナよ」

どうやら彼女はディアナさんと言っらしい。

そしてディアナさんは僕に聞いてきた。

「何でこの森に入ったの？」

もっともな疑問だ、この森は獣が多く住まっていて入って出たものはない。

「僕は、この森にもしかしたら魔女が居るかもしれないと思ってきたんです。助けてくれてありがとうございます」

魔女を探しているなんて言ったら、馬鹿らしいと言われるかもしれないが、彼女は命の恩人だから話しておきたかった。

「魔女のことどう思ってるの？嫌い、怖い？」

なぜか怒っているような感じがした。

「僕は…嫌いでも怖いとも思いません。もしそうだったら、ごうやうて来たりしません」

これは僕の本当の気持ちだった。

「でも、魔女のほうはどうなんでしょうね…僕は魔女は悪いものだと教えられましたが、魔女にとっても人間は悪いものなのかもしれない」

僕が言った事が信じられないのだろう、魔女が嫌いじゃないなんておかしいと。

でも彼女が言ったのは、僕の予想していなかった言葉だった。

「そうね……」

たった一言否定ではない肯定の言葉を彼女は口にした。

それがとても信じられなくて僕は尋ねる。

「僕のいったこと、怒らないんですか？」

けれどまたしても予想していなかった言葉が返ってくる。

「なんで怒る必要があるのか分からないわ？」

心底不思議そうな彼女の反応に、嬉しくなつて僕は笑う。

「あなたのような人に、初めて会いましたよ僕。あ、そういえば」
の森に何であなたは独りで居るんですか？」

さっきから疑問だったことを彼女に尋ねる。

「獣はどうなったのだろうか、そもそもこんな危険な森に住んでる
時点でおかしい。」

「わっ」

突然額に手を当てられ、驚いて声を出す。

「目を閉じて、合図をしたら目を開けて」

目が見えないのだから、閉じてもあまり意味がない気がするが、
取りあえず従っておく。

目のあたりがなぜか違和感がある。

「いいわよ」

目を開いた僕は、目が見えると言つことよりも先に目の前の事実

に驚く。

「さっきの答えは……私が魔女だからよ」

目の前には銀の髪に紫の瞳をした、とても綺麗な魔女がいた。

4 友情

「あなたはこれから帰るの？」

ルアンのことは嫌いではないが、帰るのなら早く帰ってほしかった。必ず来る別れが辛くなるから。

「はい」

そう答えるのを望んでいたのに、なぜか喜べなかった。

「そう、目が見えるようになった事はどう説明するの？」

自分のことがばれるのは避けたい。

「少しずつ見えてくるようになった事にしようかと思えます」

確かにそれなら説明がつくだろう。

魔力の関係で、目が見えなかった子供が見えるようになったと言った例がある。

「ばれないかしら」

ルアンは見たところまだ幼い、下手に演技すると怪しまれる。

「大丈夫です。それに両親とあまり話しませんし」

大丈夫と笑っているけれど、両親と仲が良くないのだろうかと心配になる。

「そうじゃあ心配ないわね、森の外まで送っていくわ」

そう言えばお腹がすいてるんじゃないだろうか。

「その前にご飯にしましょうか」

そう言っ私は台所へと向かった。

正直料理を作っただけでかなり疲れた。

ルアンは目が見えるようになり、いろんなものに目を輝かせている。

それはとても微笑ましいのだが、質問の量が半端無く多い。

『これは何ですか？』『包丁よ』『これが包丁ですか、話に聞いたとおりですね！』と言うような会話が何十回も繰り返されている。

「おいしいです」

おいしく出来たようで良かったとほっとする。

「さっきは取り乱してしまって、すみません……」

少し驚いて前に座っているルアンを見る。

さっき話していたときに聞いたのだが、確か10歳だそうだ。

10歳にしては妙に大人びていてしっかりしている。

「別に気にしてないわ、誰だってそうなると思うし」

「よかった」

食事が終わり私たちは森の外へと向かった。

森の入り口につくと、ルアンが立ち止まり振り返る。

「此処まで送ってくれてありがとうございます」

「どういたしまして、もうお別れね」

なぜだかちょっと寂しいと感じてしまうのはなぜだろう。

顔が仮面で見えなくて良かった。

「また、会いに来ていいですか？」

「えー!!……ええ、いいわよ」

自然と出た言葉に驚く、ここで断ればよかったのに……。

私の返事を聞いて、ルアンはとても嬉しそうに微笑んだ。

そして私が嬉しいと思っていることに驚く。

なんだか本当にルアンにあってから驚いてばかりだ。

5 小さな幸せ

あれから知ったことだが、ルアンは侯爵家のそれなりに偉いところの貴族の次男らしい。

会いにくると言ってから1月経った時、週に1回ほど屋敷から抜け出して遊びに来るようになり、毎日これるわけではないが週一回会えるだけでも幸せな気持ちになれた。

会わない時は得にする事も無いので、魔法の研究などをする。

そんな日常が続き3年経った。

ルアンは大切な友達だが、人間がすきかと聞かれたら今でも即答で嫌いと言えるだろう。

「ディアナ!!」

今では初めて会ったときと比べ、会話する口調も変わった。

「ルアン丁度良かった、今タルトが出来たところなの。一緒に食べよう」

笑顔で言つとルアンも笑顔で答えてくれる。

「そう言えば最近、転移魔法使えるようになったんだよ」

転移魔法は人間にとってかなり難しい魔法だ。

「どんどん出来ることが増えてくね。私もすごい魔法開発したんだ」

「どんなの？」

興味しんしんに聞いてくる。

「あのね……」

私が持っていた腕輪をはめて見せると、ルアンは驚いた顔をした。

「すごい、髪と目の色が変わってる」

私が作ったのは腕輪をはめると、髪と目の色が変わる魔法具だ。

ちなみにこれを使った私の髪と目の色は、栗色の髪にルアンとおそろいの緑の目だ。

「ルアンの目の色綺麗だからおそろいにしたの」

そう言うとルアンは嬉しそうに笑った。

「と言うことで……外に遊びに行こう」

「そっだね」

一瞬ルアンが固まった気がしたが気のせいだろうか。

準備が終わり私たちは町に向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9265v/>

盲目の少年と魔女

2011年8月24日12時28分発行